

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01045

研究課題名(和文) 宗教改革のジェンダー史的考察：再洗礼派の場合

研究課題名(英文) A Gender History of the Reformation: The Case of the Anabaptists

研究代表者

踊 共二 (Odori, Tomoji)

武蔵大学・リベラルアーツアンドサイエンス教育センター・教授

研究者番号：20201999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：16世紀前半に欧州で生まれ、18世紀後半から北米に渡った再洗礼派(メノナイトとアーミッシュ)の女性の役割に関する調査を行った。再洗礼派においては16世紀の段階では女性による宣教活動、預言、説教、執事としての共同金庫管理、救貧活動が広範囲に行われ、殉教者として名を残した女性も多いこと、17～18世紀に教会制度が整備される過程で男性中心の体制が築かれたことは各種の史料から明らかだが、メノナイトにおいては女性執事の伝統が残り、遠隔地への伝道に女性が活躍していた事例も見つかった。アーミッシュの場合場合は牧師(監督)の候補者指名における女性の提案権が注目される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は欧米世界におけるジェンダーイクオリティの実現の「前史」に関係しており、宗教集団とりわけプロテスタントの一派である再洗礼派が果たした役割を検証するものである。その研究成果は近代的な自由・平等の確立史の一断面(促進要因と阻害要因)を実証的に明らかにしている点で学術的・社会的意義がある。それはとりわけキリスト教の勢力が強いアメリカ合衆国の現状を考察する一助にもなる。

研究成果の概要(英文)：I conducted a study on the role of women among the Anabaptists (Mennonites and the Amish) who originated in Europe in the early 16th century and migrated to North America after the late 18th century. In the 16th century, Anabaptist women were widely involved in missionary work, prophesying, preaching, managing communal funds as deaconesses, and providing poor relief. Many women also made a mark as brave "martyrs". Various historical sources reveal that, as church structures were established in the 17th and 18th centuries, a male-dominated system emerged. However, the tradition of female deacons persisted among the Mennonites, and there are instances of women playing significant roles in missionary work to remote areas. In the case of the Amish, the right of women to propose candidates for the position of a bishop or a minister is particularly noteworthy.

研究分野：西洋史(ヨーロッパ史およびアメリカ史)

キーワード：宗教改革 再洗礼派 メノナイト アーミッシュ ジェンダー史 スイス ドイツ アメリカ

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

一般にヨーロッパの宗教改革は「近代的」なるものの出発点の一つとされているが、ジェンダー史に関して(換言すればジェンダーイクオリティの点で)どうであったかを問う実証的な研究は本研究開始当初は少ない状態にあった。現在もこの状況はほとんど変わっていない。本研究は、宗教改革の最左派である再洗礼派(とりわけスイス兄弟、南ドイツ再洗礼派、メノナイト、アーミッシュ、フッター派等)に注目し、その発生地・移民先としてのスイス、ドイツ、オランダ、北米(とくにアメリカ東部、中西部、カナダ南部)を調査対象とし、その空隙を埋める試みとして構想されたものである。

2. 研究の目的

16世紀前半のヨーロッパで誕生し、カトリックからもプロテスタント多数派からも迫害され続けた再洗礼派の諸集団について、宗教生活と共同体運営における男女の役割分担等を明らかにし、他のプロテスタント諸派にはない特徴があるかどうかを確かめることが本研究の目的である。その際、何らかの「先進性」の有無を確認するには16世紀から17世紀にかけての近世期の史料を掘り起こす必要があり、また近代への影響を確かめるには18~19世紀から現代まで展望する必要がある。そのため本研究は、近世史と近現代史の接続を企図するものでもある。

3. 研究の方法

本研究では、まず近世の再洗礼派の女性たちの活動に関して、17世紀後半に刊行された『殉教者の鏡』(1660年初版)という歴史書を基礎史料としてプロソポグラフィックな調査を行う方法をとった(この書物はおもに16世紀前半から17世紀後半までのスイス、ドイツ、オランダなどでの迫害事件およびそれらに関係する人物に関する各種の歴史的資料を集成したものである。具体的には個々の人物に関する裁判記録、尋問記録、当事者たちの書簡や遺言書、処刑を目撃した人たちのメモ類である)。さらにフッター派の指導者たちが残した大冊の年代記(二種類)も使い、同じ方法の研究を行った。加えてスイス諸都市(とりわけ再洗礼派の誕生地と移住地)の公文書館に残る再洗礼派関係の未刊行史料も同じ目的のために用いた(現地調査を行う必要があったが、コロナ禍の影響により、2023年3月にチューリヒ市の公文書館やベルン市の教会の書庫での調査を行ったほかは、ドイツのいくつかの公文書館に電子データの提供を依頼するなど、遠隔での調査を行う方法に頼らざるを得なかった)。具体的には各種資料から女性の人名を抽出し、活動地域・活動内容・年代などを確かめ、研究発表用のリストを作成した。全体として200件以上になったが、これをそのまま論文等に掲載するのは煩雑であるため、代表例を選んで紹介・分析する方法をとった(このテーマについての論文等の公表は継続中である)。

近現代については、北米に移民した再洗礼派集団(とりわけメノナイトとアーミッシュ)に注目し、集会の記録、日記、書簡、口承(ファミリーロア)の分析を行う方法をとった。現地調査はようやく2023年8月に実行できたが、ペンシルヴァニア州以外の場所やカナダでの調査は断念するしかなかった(当初の現地調査計画はコロナ禍で変更せざるを得なかった)。それでも訪問先のペンシルヴァニア州ではメノナイトの女性牧師を対象とした聞き取り調査も行うことができた(20世紀の女性牧師に関する研究が進んでおり、出版物も出始めているので、それらを参考にし、牧師職を志願した動機やこれまで経験してきた困難などについて質問し、後述のような回答を得た)。なお北米の再洗礼派は類似の他派の存在を強く意識していたから、イングランドから到来したクエーカーなどとの比較研究も行った。

4. 研究成果

近世期の再洗礼派の女性たちは、例えば秘密集会の場所の設営や隠れ家の提供、飲食物の準備、傷病者の看護といった補助的な仕事だけでなく、いわゆる伝道活動すなわち聖書の朗読や説教を行っており、場合によっては超自然的な「啓示」に基づく「預言」も行っていたことが数多くの史料によって明らかにできた。また各種の史料から、単身女性や女性グループでの亡命・移住のケースが相当数あることがわかり、未婚者、寡婦、離婚者たちが再洗礼派に加わっていたことも明らかにできた(再洗礼派の教団組織は家父長制的社会において抑圧ないし冷遇された女性たちのアサイラムの役割を果たしていたと言える)。

西南ドイツの未刊行史料を精読したことによる成果もここに記しておきたい。農村部の再洗礼派の秘密集会の指導者のなかに女性がいたことが分かったからである(この場合、信徒集団にも女性が多かった)。加えて、モラヴィアとスイスの間を往来していたフッター派のリーダーたちに関しては、女性だけの伝道活動の事例があることも分かった。

前近代すなわち啓蒙と市民革命以前のジェンダー理解および当時の性別役割分業は、再洗礼派のようなラディカルな非公認の分派運動の場合は相対化されており、マックス・ヴェーバーがというような家父長制の(再)強化は必ずしも起こっていなかったことは明らかである。なお再洗礼派の場合、逮捕・拷問された女性たちは「男性の徳 *virtu*」を有する英雄として扱われることもあったが、これは古代の女性殉教者の礼賛にもみられるレトリックである。

2022年3月のスイスでの現地調査では、民間伝承のなかの女性像と再洗礼派の女性像の比較

を試みるためにスイス連邦博物館のアルプスの伝説に関する特別展も見学し、関係する資料を集めた。そこには呪術（病気・怪我・天災を避ける祈祷や護符の利用）、民間医療（植物由来の飲み薬や軟膏、湿布の利用）、助産の分野で自律的な活動を展開した女性たちにまつわる口アが数多く含まれており、そこには再洗礼派の女性が「預言」や「説教」を行うことを可能にする文化的背景が見いだされた。

ところで近世の再洗礼派の「日常生活」に焦点を定めた場合、彼らのジェンダー理解は非常に保守的であった。メノー・シモンズは『真のキリスト教信仰について』（1541年ごろ）のなかで女性信徒たちに次のように呼びかけている。「理にかなったことであれば、万事あなたの夫に服従しなさい」「日用品の買い出しに出たり〔教会で〕主の言葉に耳を傾けたり、聖餐にあずかったりする以外は、家のなかになさい。自分に割り当てられた仕事に、つまりあなたの子どもと家と家族の世話に忠実にとりくみなさい」と（Menno Simons, *The True Christian Faith*, in: John C. Wenger, ed., *The Complete Writings of Menno Simons*, Scottdale, Pennsylvania, 1956, 376-383）。

こうした教えを近現代においても厳格に守っているのは、17世紀末にメノナイトから分離した厳格派アーミッシュである。アーミッシュは亡命と移住を繰り返して北米の地にたどり着き、古い生活様式を保っている（その総人口は2023年現在で約385,000人である）。彼らは服装で「現世」（罪深い俗世）と一線を画す姿勢を示す。女性たちは単色の長いドレスとエプロン、ヘッドカバーを身につけているが、それは勤勉と従順と敬神の表現であり、次のようなパウロの言葉を根拠としている。「婦人たちは教会では黙っていなければならない。彼らは語ることが許されていない。だから、律法も命じているように、服従すべきである。もし何か学びたいことがあれば、家で自分の夫に尋ねるがよい。教会で語るのは、婦人にとっては恥すべきことである」（第一コリント14章）。さらに「祈をしたり預言をしたりする時、かしらにおおいをかけない女は、そのかしらをはずかしめる者である」との教えもある（第一コリント11章）。女性のヘッドカバーはメノナイト保守派においても維持されている。アーミッシュとメノナイト保守派の場合、男性も長い顎鬚と黒い服をまとい、男女ともに「現世」との交わりを最小限にとどめている。ただしメノナイトの進歩派には、男性側から次第に服装を自由化してきた歴史がある。19世紀から20世紀前半にかけての時期には、一般社会の背広を着た男性たちと「制服」のようなドレスとヘッドカバーもしくはボンネットをまとう女性たちの集合写真が数多く残されている。その後、彼女たちは制服（と制帽）を捨て、社会に出て仕事をもつようになる。アーミッシュとメノナイト保守派の世界でも、食品や工芸品などのスモールビジネスを手がける女性たちが増え、現在に至る。家事と育児、農場での労働に追われるライフスタイルが変化したことも、その背景である。そもそも農業従事者は減っており、工場や商店で働くアーミッシュの家族が増えているのである。たとえばオハイオ州のアーミッシュのうち農業従事者は10パーセントにすぎない（50年前は90パーセントであった）。

アーミッシュとメノナイト保守派の一部も、伝統からの離脱の過程にある。彼らは家族とコミュニティの団結を守るために屋内に電話を置かず、外部の世界との「直結」をもたらず公共の電気（電線）を用いず、はるか彼方に高速で移動できる自動車避け、馬車を使う生活を送ってきたが、すくなくともビジネスではスマートフォンを用い、買い出しなどに自動車を使うようになっている。ショベルカーや耕運機は昔から活用してきた。進歩派のビーチ・アーミッシュは、質素な黒塗りであれば自家用車の所有も許している。しかし本当の意味での「革新」が起きているとは言えない。アーミッシュの宗教生活そのものは相変わらず男性中心であり、他のプロテスタントとは違って「女性牧師」は存在しない。一方、進歩派のメノナイトにおいては、後述するように、この点で大きな変化が起きている。

ところで、聖書とりわけパウロ書簡は再洗礼派を含む欧米のキリスト教諸派の男女差別のものになっているが、同じパウロが「キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである」と述べている（ガラテヤ書3章）。また使徒行伝2章には「終わりのときには、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう」というヨエル書の言葉が引かれている。終末的な地平においては若い女性にも「預言」（神の言葉の仲介）の力が与えられるという理解が示されているのである。再洗礼派運動の初期段階（16世紀から17世紀）においてはかなり多くの女性預言者ないし説教者が現れたが、それも聖書的な実践であったと考えられる。ただし彼女たちは定まった職制によらず、個人として自発的に行動し、聴衆を集めていた。

その後の再洗礼派系の諸集団（とりわけメノナイトとアーミッシュ）においては、明らかに「保守化」が起きている。正統派・多数派のカトリックおよびプロテスタント諸派の世界において体制化が進み、保守的社会秩序が確立されるなか、彼らのあいだでも男性支配が貫徹していったのである。クエーカーのように17世紀から少なからぬ女性たちが説教を行うミニスターの役割を担った例もあるが、プロテスタント諸派において女性牧師が登場するのは19世紀以降のことである（メノナイトの場合は20世紀に入ってからである）。

19世紀に登場するプロテスタントの女性牧師の先駆け（正式な任命を伴うケース）は、いわゆる自由意思バプテスト派のクラリッサ・ダンフォース（Clarissa Danforth, 1792-1855）である。その後、Congregationalist（組合派）、Methodist、Anglican、Unitarian、

救世軍、カンバーランド長老教会、ジャーマン・バプテスト・プレザレン（ダンカー）などが女性牧師を迎えた。メノナイトの女性牧師には、公式記録を伴うものとしては 20 世紀に入ってから誕生している。それは 1911 年のことであった。アン・ジェマイマ・アレバック（Ann Jemima Allebach, 1874-1918）という女性がフィラデルフィアの第一メノナイト教会で牧師の資格を与えられたのである（オランダでも同じ年にメノナイトの女性が牧師職に就いている）。アレバックはペンシルヴァニア州モントゴメリー郡の生まれだが、活動の拠点はニューヨーク市であった。アレバックは自由主義神学で名高いユニオン神学校で学んだ経歴の持ち主であり、女性参政権運動にも関わっていた。当時のメノナイト教会はいまだ保守的であり、牧師任命も彼女の強い希望に応えた形式的・消極的なものであった。そのため説教や牧会の場は提供されなかった。彼女を実際に牧師として迎えたのはニューヨーク市ブルックリンのバプテスト教会とロングアイランドの改革派教会であった。アレバックのあと、メノナイト教会は 1970 年代まで女性牧師を任命しなかった（ただし教育や社会的活動に関しては多くの女性リーダーが育っている）。1970 年代には、聖書は教会における女性の従属的な地位を求めているか否かについての活発な議論が展開され、進歩派の力が増していった。

1972 年、イリノイ州ロンバードのメノナイト教会で女性牧師が誕生した。エマ・リチャーズ（Emma Richards, 1927-2014）である。リチャーズはインディアナ州のゴーシェン大学、ゴーシェン聖書神学校で学び、オハイオ州のブラフトン大学で教鞭をとった知識人である。彼女は 1954 年から 1966 年まで夫ジョー・リチャーズ（Joe Richards, 1929-2016）とともに日本に滞在し、おもに北海道の本別町と札幌で伝道に従事した。エマ・リチャーズが説教を始めたのは日本においてである。彼女が保守的な風土の残るロンバードの教会で牧師になれたのは、学校教育にも責任を負う多忙な牧師（夫）を助けるという理由づけがなされたからであった。独立独歩の女性牧師の出現は 1976 年、コロラド州アーヴァダにおいてである、その氏名はマーリン・ミラーである（Marlin Miller, 1944-）。彼女は子どものころから兄弟たちと「教会ごっこ」をするなかで説教者の役を演じ、牧師になりたいと願っていた。結婚相手が牧師あるいは宣教師になることを望んだ時期もあったが、時代の変化にも助けられ、自分自身で夢を実現させたのであった。その後、多くの女性がメノナイト教会の牧師になった。進歩派の「メノナイト教会 USA」の場合、2023 年の時点で牧師の 35 パーセント弱が女性である（それでも男性中心の運営体制に対する内部的な批判がある。<https://www.mennoniteusa.org/news/clergywomen/>）。

報告者は 2023 年 8 月の夏にペンシルヴァニア州ランカスター郡ほかで現地調査を行ったが、そのさいメノナイト教会 USA 系のアクロン・メノナイト教会（Akron Mennonite Church）をたずね、女性牧師レイチェル・ノルト（Rev. Rachel Nolt）から聞き取りを行った。彼女はインディアナ州のメノナイト神学校で学び、2013 年から同州で牧師を務め、2017 年からペンシルヴァニア州アクロンの教会で働いている。以下、聞き取りの内容を記す：

1) 牧師になるきっかけを教えてください。

若いころから教会が大好きで、聖書を愛読していました。結婚相手は牧師が良いと思っていました。その後、夫に牧師になる気があるかと聞いたら、答えはノーで、「自分でなったらいい」と言われました。十数年たってからは、知人たちの勧めもあって神学校で聖書の研究にとりくみました。そのあと私は、牧師になるようにとの神の召命を受けたと感じました。

2) 教会で牧師として働くなかでジェンダー問題に起因する困難を経験したことがありますか。女性を「第二牧師」としてしか受け入れないメノナイト教会もありますが、私はそのような教会を選びませんでした。ですから、いま働いている教会でジェンダー問題に関連するトラブルを抱えたことはありません。ただし、この地域には女性牧師は私一人しかいませんから、それ自体は困難な状況です。

3) 第一コリント 14 章に記されているような男女差別をどのように神学的に克服しましたか。説教を行うとき、どのような形でキリスト教的なジェンダーイデオロギを説いていますか。聖書は男性の著者たちによって書かれており、当時の男性の価値観を反映していますから、逐語的に信じるべきではありません。解釈が必要なのです。聖書のなかの女性差別は、当時の社会のなかでのことであり、第一コリント書の当該の箇所は、コリントの教会における具体的な課題に即して書かれており、普遍的に通用する議論ではありません。聖書には女性のミニストリーについての記述も豊富に存在します。

ノルト牧師の聖書理解は、書かれていること（とくにキリストの山上の説教）を逐語的に受けとめて実践に移そうとするアーミッシュやメノナイト保守派の立場（16 世紀から 17 世紀にかけて確立したもの）とは違って「近代的」である。なおノルト牧師にはマーリン・ミラー牧師に似た面がある。両者とも少女時代に無邪気に牧師になりたいと願い、やがて現実を知って「牧師の妻」になる方法を考え、最終的に自分自身の職業選択によって教会のリーダーになったのである。

北米のメノナイト教会は女性のリーダーシップに関してすこしずつ前進している。その過程には 16 世紀から 17 世紀にかけての再洗礼派運動の「最初期」に戻る面があると判断できる。すなわち男女の別なく殉教の死を覚悟した預言と説教の歴史への回帰である。なおアーミッシュの多くは保守的なままであるが、進歩派も増えており、やがてはメノナイトと同じ現象を経験する可能性もある（じっさいにアーミッシュからの離脱とメノナイトへの合流は各地で起きている）。アーミッシュとメノナイトの一部は福祉事業や伝道活動を共同で行っている。

北米の再洗礼派系グループに関する本研究の成果は、ペンシルヴァニア州のエリザベスタウン大学の附置組織である再洗礼派・敬虔派研究センター（Young Center for Anabaptist and Pietist Studies）の協力で行った調査で得られたものを数多く含んでいるため、同センター主催の国際会議（2025年7月22～24日）にて成果の一部を公表する予定であり、現在、プログラムを調整中である（再洗礼派には近世日本のかくれキリシタンと思想・行動面で近似している点があるので、比較も行いながらの報告になる見込みである）。なお論文としては同センターとオハイオ州のアーミッシュ・メノナイト情報センター“ベハルト”（Behalt, the Amish & Mennonite Information Center, Berlin, Ohio）が共同で編集・刊行している学術誌 *The Journal of Plain Anabaptist Communities* に一文を掲載する予定である。和文では学内誌、全国学会誌、図書・翻訳書の形で成果公表を行う予定である。図書のなかには広く一般読者を想定した概説書も含まれている（現在3社と契約を交わしている）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 踊 共二	4. 巻 32
2. 論文標題 近世期クエーカー派の女性運動家たち：サーバントリーダーの群像	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 武蔵大学総合研究機構紀要	6. 最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 踊 共二	4. 巻 55
2. 論文標題 宗教改革の概念史：原語と日本語	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 踊共二	4. 巻 274
2. 論文標題 再洗礼派のディアスポラと社会的モビリティ：チューリヒのランディス家の場合	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 19-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 踊共二	4. 巻 53-3/4
2. 論文標題 ジェンダー史からみた宗教改革急進派：スイス兄弟団・フッター派・メノナイト	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	6. 最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 踊共二	4. 巻 別冊
2. 論文標題 失われた故郷を探して：メノナイトとアーミッシュの大西洋横断ネットワーク	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 武蔵大学総合研究所紀要別冊	6. 最初と最後の頁 97-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 猪刈由紀・踊共二・佐藤公美・皆川卓	4. 巻 172
2. 論文標題 モビリティの歴史学のために：中・近世ヨーロッパにおける空間・社会移動の歴史研究の理論的前提	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 甲南大学紀要・文学編	6. 最初と最後の頁 119-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 踊 共二	4. 巻 174
2. 論文標題 再洗礼派とかくれキリシタン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 62-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 踊 共二
2. 発表標題 欧米と日本の宗教改革像
3. 学会等名 第73回日本西洋史学会大会小シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 踊 共二
2. 発表標題 1525 年の宗教改革：成人洗礼・信者の教会・非暴力主義
3. 学会等名 日本ルター学会 2023 年度学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tomoji Odori
2. 発表標題 The North American Mennonite and Amish Families of Swiss Descent: A Case Study of the Landises from Rural Zurich.Their Spiritual, Spatial, and Social Mobility in the Early Modern Period
3. 学会等名 Political, Religious, and Social Dynamics in Boundary Areas. International Conference at LabiSAIp, Universita della Svizzera Italiana (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Tomoji Odori
2. 発表標題 The Amishman Jonathan B. Fisher's Homecoming Visit from Pennsylvania to Switzerland in the Early 20th Century. A Prelude to the Amish and Mennonite Transatlantic Heritage Tours
3. 学会等名 Spatial and Social Mobilities in the Medieval and Early Modern Alpine Regions. Workshop at Laboratorio di Storia delle Alpi/Universita della Svizzera italiana (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 森原隆編、踊共二分担執筆	4. 発行年 2024年
2. 出版社 成文堂	5. 総ページ数 328
3. 書名 『ヨーロッパの「統合」の再検討』所収の「第7章「調和せる不調和：近世都市チューリヒの宗教と社会」 139-157ページ	

1. 著者名 荒川正晴ほか編、踊共二分担執筆	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 304
3. 書名 『岩波講座世界歴史15巻：主権国家と革命 15～18世紀』所収の「宗教改革とカトリック改革」の章（73-100ページ）	

1. 著者名 土井健司ほか編、踊共二分担執筆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本キリスト教団出版局	5. 総ページ数 256
3. 書名 『キリスト教神学命題集』所収の「ミヒャエル・ザトラー」の項（114-117ページ）	

1. 著者名 土井健司、村上みか、芦名定道、島田由紀、踊共二ほか32名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本キリスト教団出版局	5. 総ページ数 252
3. 書名 キリスト教神学命題集	

1. 著者名 石田勇治、佐藤公紀、柳原伸洋、宮崎麻子、木村洋平 踊共二	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 744
3. 書名 ドイツ文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------